Osaka University Knowledge Archive

Title	モンテッソーリ教具成立過程の研究 : セガンからブルヌヴィルを経てモンテッソーリへ
Author(s)	竹田, 康子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59508
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　竹　田　康　子　　）	
論文題名	モンテッソーリ教具成立過程の研究 ―セガンからブルヌヴィルを経てモンテッソーリへ―

論文内容の要旨

本論文は19世紀後半から20世紀前半にイタリアで成立したモンテッソーリ教具の成立過程とその歴史的意義を考察することを課題としている。すなわち、セガンからブルヌヴィルを経てモンテッソーリへと到る個々の教具の継承・開発過程と、モンテッソーリ教育理論形成の基盤となる教育実験の道具としての教具の意義を考察するものである。

序章では、教具の意味を、モンテッソーリ教育理論からの演繹によって理解するのではなく、個々の教具の成立過程やその特質から考察すべきであることが示唆される。こうした観点は、モンテッソーリ教育において教具を完成形と見なすことに対する批判を含意している。

第1章「モンテッソーリ教育の基盤」では、モンテッソーリ教育の一要素であった教具がその教育を展開させ、支える核であったことを説くために、彼女の前半生における学問的基盤を分類整理した。重要な点は、モンテッソーリが、教育分野に自然科学の研究方法（実験）を取り入れ、その条件を作り出すために教具を採用したこと、教具の多くはすでにモンテッソーリ以前には知的障害児治療教育においてセガン等が開発していたこと、さらに、教具を使用する子どもの観察と新しい教具を形成するプロセスが、モンテッソーリ教育の基盤であったことである。

第2章「モンテッソーリ教育と教具の誕生」では、モンテッソーリ教育の出発点がブルヌヴィルによるセガン教具の復元にあったことを歴史的に確認する。彼女は「子どもの家」に先立つ知的障害児教育においてセガン教具を使用するという方法を確立していた。また、その知的障害児教具形成の段階で、すでに彼女は小学校科目の教具実験を行なっていた。以上から、歴史的な教具の展開に即してみれば、「知的障害児教育の系譜」の末端にモンテッソーリが位置づくことが明らかとなった。

第3章「教具の発展史」では、セガンからブルヌヴィルを経てモンテッソーリに至る教具継承の史的再検討の一環として、モンテッソーリによる教具の発展的継承の詳細を取り上げる。ここではモンテッソーリ研究においては初公開の教具資料（パリ医学史博物館蔵のセガン教具実物写真）を根拠にして、セガンとモンテッソーリを繋ぐ教具の歴史的変化を「形状の類似性」に着目して再検討した。その結果、第1に、教具の発展系列からみれば、モンテッソーリは、セガン教具の形態および用途を継承するのみでなく、その用途を置換、拡大、縮小しつつ彼女自身の新たな教具へと発展させ、不要な用途のセガン教具を放棄したこと、第2に教具の歴史的な変化を知的教育の観点からみれば、知的障害児教具から健常児教具（M教具）への教具展開が、小学校科目（数、言語、文化）への指向と教具の一般化・抽象化を特徴とすることが明らかになった。

第4章「教具の拡張」では、モンテッソーリが創設した「子どもの家」以降の新しい教具展開を考察した。モンテッソーリは「子どもの家」以降、小学校課程の教具のみならず数学と幾何学では上級課程の教具を形成し独自性を発揮した。しかしそれは、科学的実験的教育に対するカトリックからの批判、さらにムッソリーニのファシスト国家となったイタリアとの決別を背景としていた。かくして、モンテッソーリ教育にはグローバルで普遍的な視点が加味され、教具の拡充にもその影響が及んだのである。

終章では、以上の教具の形成過程とその意義に関する歴史的考察から、モンテッソーリ自らがかつてそうしたように、新たな教育知を発展させるためには、本来教具が有していた教育実験の道具としての性格を取り戻すことが重要であることを示した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　竹田　康子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	藤川　信夫
	副 査　教授	小野田　正利
	副 査　准教授	岡部　美香

論文審査の結果の要旨

本論文は、セガンからブルヌヴィルを経てモンテッソーリへと至る教具の継承・開発過程を図像資料（写真・挿絵）とテキスト資料をもとに跡づけることによって、19世紀後半から20世紀前半のイタリアでモンテッソーリ教具が生まれた経緯とその歴史的意義を考察することを目的としている。

序章では、先行研究の一部に見られるように、モンテッソーリ教具の意味を彼女の教育理論からの演繹によって理解するのではなく、教具そのものの成立過程や特質から考察すべきであることが示唆される。こうした観点は、教具を完成形と見なそうとする、モンテッソーリ教育の実践および理論研究に見られる傾向に対する批判を含意している。

第１章では、彼女の前半生における理論形成過程を分類整理することで、教具がモンテッソーリ教育理論を展開させ支持する核であったことを明らかにしている。ここでは、モンテッソーリは、実験という自然科学的方法を取り入れることで教育の科学化を目指し、その実験の条件を作り出すために教具を使用したこと、その教具の多くは、ブルヌヴィルによって再評価・復元されたセガンの知的障がい児治療教育用教具であったことが示される。

第２章では、主にテキスト資料をもとにして、セガンが知的障がい児治療教育のために用いた教具リストと、モンテッソーリがローマで知的障がい児教育のために用いた教具リストを比較対照することで、セガン教具の多くがモンテッソーリの障がい児教育実践で用いられたこと、しかし、その後彼女が健常児用に用いることになる教具の一部がすでにこの時点で先取り的に用いられていたことが明らかにされる。

第３章では、第２章で明らかにされた教具の継承・発展過程が、とくにモンテッソーリ研究およびセガン研究において初公開の教具資料（パリ医学史博物館所蔵のセガン教具実物写真）を根拠にして裏づけられる。その際、教具の形状の類似性を基準として用途の置換、拡大、縮小、新開発、放棄のカテゴリーに分類することによって、この継承・発展の過程がより詳細に解明されている。さらに、「感覚の分離」「感覚の連合」「刺激の漸次的細分化」などの教具製作のための原理もセガンからモンテッソーリへと継承されたこと、しかし、障がい児教育から健常児教育へという教育対象の変化によって教具全般に一般化・抽象化の傾向が見られ、またこの傾向に則して教具製作の諸原理が適用される教具にズレが生じていることも示されている。

第４章では、同様に多くの図像資料を用いながら、モンテッソーリが創設した「子どもの家」以降の新たな教具の展開が示される。その際、モンテッソーリは、「子どもの家」以降、小学校課程の教具のみならず、とくに上級課程の数学と幾何のための教具を開発し、それがモンテッソーリ教育の世界的普及を促した。この章では、その背景に、科学的実験的教育に対するカトリックからの批判や、ムッソリーニのファシスト国家となったイタリアとの決別があったことも示される。

終章では、以上のモンテッソーリ教具の形成過程とその意義に関する歴史的考察から、教具を完成物として継承していくのではなく、モンテッソーリ自身がかつてそうしたように、新たな教育知を発展させるための教育実験の道具として用いるべきことが主張される。

本論文は、モンテッソーリ教育の先行研究においてしばしば暗黙の前提とされてきたモンテッソーリ教具のオリジナリティを、ブルヌヴィルにより復元されたセガン教具の実物（写真）との比較という新たな方法によって再検討した点、さらに、教育実験の道具としての教具の本来的意味を改めて主張することで、教具による教育という方法の将来的継承・発展にも道を拓いた点で、学術的に重要な価値を有する。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。